

口語表現

藤木 美奈子

1. 「口語表現」開設の経緯

「口語表現」は、口頭による基本的な自己表現能力を身に付けていくためのスピーチの実践科目である。

1989年、桜美林大学に国際学部が新設された折、母語である日本語で論理的に考え、自らの意見を的確に述べる能力を養うと共に、大学教育を受ける上で必要な日本語の運用能力を高めることを目的として、日本語による「読み」「書き」「話す」力を鍛える表現教育が導入された。国際学部で始まった「口語表現法」は、2003年からは全学必修科目となり、その後、名称も「口語表現」と改められた。

「口語表現」が、他大学の類似の表現科目と異なるのは、日本語による表現技術を磨いていく授業の中で、「話す」教育を「書く」とことは別にして独立して行っている点であり、スピーチ・コミュニケーションの授業が、全学共通の1年次の必修科目として据えられている大学は、極めて珍しいと言えよう。

「口語表現」科目には、スピーチの基礎力を培っていく必修科目の「口語表現Ⅰ」と、「口語表現Ⅰ」を履修済みの学生を対象とした、スピーチの応用力を育てていく選択科目の「口語表現Ⅱ」があるが、本稿では、以下、「口語表現Ⅰ」について述べていく。

2. 「口語表現Ⅰ」の授業概要

「口語表現Ⅰ」は、(1)人前で話すことに対する苦手意識を克服し、自然体であがらずに落ち着いて自己表現できる能力の開発を目指すとともに、(2)筋道を立て、聞き手に分かりやすく伝えるコミュニケーション能力を身に付けることを目的としている。

1クラスの学生数は25名程度である。全学の1年生が対象であるため、この中には、留学生も含まれる。春学期、秋学期ともに、45～48クラス開設されている。コアクラス(必修科目のクラス)とは別に、1年次に単位を取得できなかった学生向けの再履修クラスも、各学期6クラス開講している。

「口語表現Ⅰ」を担当している教員は、専任、非常勤を含め、20名前後である。授業は、

共通テキスト¹に沿って進められる。学生は、与えられたテーマで、3分程度のスピーチを行う。発表の様子はビデオ撮影され、音声はICレコーダーに録音される。聞き手であるクラスメートは、ひとりひとりの発表に対して、目線や表情、姿勢、声の大きさ、筋道が立っているかどうかといった評価項目をチェックしていき、良かった点やアドバイスと共にシートに記入する。授業の最後に、撮影したビデオ映像を流し、発表者は自分のスピーチの様子を点検する。レコーダーに録音された音声ファイルは家に持ち帰って聞き、映像や録音、クラスメートからの評価シートを参考に、自分の発表を振り返る。音声は一言一句書き起こし、自ら赤ペンを入れて添削した上で、自己分析を行い、これらをスピーチレポートとしてまとめ、次回授業で提出する。

週1回、1学期間15週の授業を通して、合計5回のスピーチを行う。発表課題と各回の狙いは以下の通りである。

- (1)「ユニークな自己紹介」(スピーチの基本を知り、人前で話すことに慣れる)
- (2)「とっておきの情報を伝える」(情報を正確に伝える)
- (3)「忘れられない思い出・体験」(テーマを明確にし、情景・心理描写を効果的に行う)
- (4)「新聞記事についての意見」(自分の意見を論理的に述べる)
- (5)「就職の面接会場で」(将来のビジョンを考え、それに即した自己PRを行う)

成績は、出席点(出席および参加意欲)50%と、実技点(スピーチ発表およびレポート提出)50%に分けられ、その総合評価によって決定する。

3. アンケート結果から見る「口語表現Ⅰ」の成果

藤木(2009)は、「口語表現Ⅰ」を履修することで、学生のスピーチに対する苦手意識がどのように変わったかを、スピーチに対する自信の変化という観点から調査している。スピーチに対する自信のほどを5段階に分け(5:非常に自信がある、4:少し自信がある、3:どちらとも言えない、2:あまり自信がない、1:まったく自信がない)、アンケート調査した結果(有効回答数278)、初回授業時の自信レベルは平均で1.9だったのに対し、最終授業時は3.4へと上昇し、1.5段階の伸びが見られている。

また、藤木・前川・勝又(2010)は、スピーチに対する自信レベルを4段階の評定尺度で測り(4:自信がある、3:自信がややある、2:自信があまりない、1:自信がまったくない)、アンケート調査を行ったところ、初回授業時(有効回答数206)の平均値は1.51だったのが、最終授業時(有効回答数175)では2.51となり、1.00の上昇が観測された。t検定の結果、この差は統計的に有意であることが確認されている。

藤木の報告によれば²、「口語表現Ⅰ」が人前で話すことに対しての苦手意識の克服に役立ったかどうかについて学生に意識調査したところ（有効回答数 139 名）、「ややそう思う」「大いにそう思う」を合わせて、94.2%の学生が役立ったと回答している。

また、これらのアンケート内で学生から寄せられた授業の感想として、以下のようなものがある。「最初は絶対に出来ないと思っていたけれど、やってみると面白かった」、「これまでずっと人前が大嫌いだったのに、今は寧ろ楽しくなって、この変化に自分が一番驚いている」、「ビデオや録音を通して自分を知ることができ、スピーチの上達だけでなく、自己理解が進んだ」、「この授業が必修で本当に良かった。そうでなければ履修していない。もしそうなら、このままずっと人前が怖いままの自分でいたと思うとぞっとする」。

このように、アンケート調査の結果や学生の感想から、「口語表現Ⅰ」の授業を通して、学生はスピーチへの苦手意識を解消していき、人前で話すことに対して自信を付けている様子が窺える。

4. 「口語表現Ⅰ」から得られる学びと学生の様子

こうした授業の成果は、何によってもたらされるのであろうか。授業形態や指導方法など様々な要因が考えられるが、「口語表現Ⅰ」は学生にとってどういう学びのある授業なのかを考察していきながら、この科目の意義や特徴について掘り下げていくこととする。

（1）経験不足からくる思い込みが解消

初回の授業で、スピーチの授業と聞いて、拒絶反応を示す学生は多い。藤木（2007、2009）の調査では、初回授業時、スピーチに対する自信が、「全くない」もしくは「あまりない」と答えた学生は8割にのぼる。では、彼らが過去どの程度、人前で話したり、話し方の訓練を受けたりしたのかを問うと、ほとんどそのような経験がない学生ばかりである。スピーチの経験がないのにも拘らず、最初から苦手意識を抱いている様子が窺える。そもそも自分は、人前で話す能力が生まれつき欠如していると真剣に考えている学生も少なくない。

こうした実情があればこそ、スピーチの能力は生まれつきのものではなく、訓練次第で開発されるものだということを、体験を通して知り、その能力を段階を経て身に付けていくことが出来る「口語表現Ⅰ」は、必修科目として一層の意義を有すると言えよう。

学期はじめの頃はスピーチの授業がある日は憂鬱で仕方なかった、通学途中の電車の中でお腹が痛くなった、などと打ち明ける学生も珍しくない。当初は、嫌々ながら受講して

いても、いざスピーチを始めてみると思っていたほど苦痛でないことが分かり、回を重ねるごとに慣れていき、上達の喜びを味わうようになる。自分は出来ないと頑なに思い込んでいたのが、訓練を受けてみてはじめて、その思い込みこそが自分を苦しめていたことに気づき、スピーチへの意識が積極的なものに転じる学生は多い。

(2) 学生主体の自己発見型授業

「口語表現Ⅰ」の授業では、主役はあくまで学生であり、教員はファシリテーターとして、授業の進行や、学生の発表を手助けするに過ぎない。教員が良いスピーチのあり方を知識伝授するのではなく、学生が自身の発表を通して、自らの話し方を点検し、良いところは伸ばし、反省点はどうしたら改善できるのかを自分自身で探っていく。

ここで大いに役立つのが、スピーチ発表のビデオ録画と、音声録音である。視覚と聴覚両面から自分の発表を客観的に振り返ることで、これまで気付かなかった自らの話し方の癖と向き合うことになる。自分では全くそんなつもりはないのにビデオを見ると姿勢が激しく乱れていたり、アイコンタクトを取っていた筈が目線がきょろきょろして逆に落ち着きなく見えたり、普通のスピードで話しているつもりが自分でも聞き取れないほど速かったりと、映像や録音を通して、思いもよらなかった一面が浮かび上がってくる。学生はこういった自らの癖を認識し、ひとつひとつ改善していくことで、スピーチに自信を付けていく。

こうした、学生自らの気づきと動機付けを育む上で重要になってくるのが、教員の学生との関わり方であり、学生が躊躇なく自己開示できるようなクラスの雰囲気作りである。教員は、学生一人一人の個性を尊重しながら、学生が自助努力によって成長軌道に入っていけるよう、サポートしていく。時には技術的なアドバイスも加減しつつ、長所を最大限引き出しながら、学生の主体性、積極性を伸ばしていくよう指導している。

(3) 相互評価がもたらす自己肯定感

学生のスピーチ発表に対して、クラスメートは評価シートを記入していくが、聞き手からのコメントに救われたという学生は多い。自分の発表が終わって、意気揚々と引き上げる学生はまずいない。あそこがダメだった、ここが出来なかったと、うまくいかなかったところばかりを拾い集めて落ち込んでしまう学生がほとんどだが、そんな時でもクラスメートが何かしら良かった点を書いてくれる。学生は、それを見て勇気付けられたり、自分が知らなかった長所を友達が見つけてくれることで、大いに励まされたりするのである。

こうした経験を通して、自分ガリスナー側に立った時にも、発表者のスピーチから良かった点を積極的に見つけていこうとする視点が自然に醸成される。このことは、他者肯定

の意識を育むと共に、同じ視点を自分にも適用することで自己肯定感を高めることにも繋がる。同時に、人の発表を客観的、分析的に聞くことで、どういうスピーチが分かりやすく人に好印象を与えるのかを、他者の姿から学んでいくことになる。

このように、お互いがお互いを評価し、認め合い、良かった点を褒め、更なる成長を願ってアドバイスを伝えるというチームプレイが、仲間同士の信頼関係やクラスの一体感、成長を支えあう空気を作り、クラス全体の活力となって有機的に作用する。個々のスピーチの上達だけではなく、クラスの皆が一緒に頑張っている雰囲気にも励まされるという声は多い。

(4) 自己表現の楽しさと自己成長の喜び

「一週間の内でこの授業が一番嫌だったけれど、今は一番楽しい」。学期末に、そんな風に感想を述べる学生も少なくない。自分という人間を自分の言葉で発信することの喜びや、苦手なものを克服できた達成感が、その言葉に滲み出ている。自己成長の喜びは、その人に輝きと自信を与える。嫌いなものが嫌いでなくなった時、その成功体験が、更なる未知の世界への挑戦を後押しする勇気をももたらす。「口語表現の授業を受けてから、大学生活が楽しくなった」と言う学生が多いのも、単にコミュニケーション能力が向上したからではなく、未経験のものを怖がらず、ものごとに積極的にチャレンジしていくことの大切さを身を以て知ったことが大きく影響していると言えよう。

5. 今後の課題と展望

国際化や社会の多様化が加速し、企業もコミュニケーション能力が優れている人材を求める中、自分の考えや意見を自らの言葉で的確に、且つ聞き手に分かりやすく伝える能力は、今後ますます必要とされるであろう。

人前で話すことに根強い苦手意識を抱える学生が多い中で、実践練習によって自己表現能力を開発する機会を、全学生に必修科目という形で与えている「口語表現Ⅰ」は、高等教育において、この分野での先駆的な取り組みと言えよう。

今後は、これまでの蓄積を生かしながら、時代の変化に応じた、プログラムの一層の充実化が求められるであろう。自己表現は自己開示を伴うが、自分のことを語りたがらない学生が増え、教員がクラスの雰囲気作りに苦慮するケースも出てきている。入学してくる学生も年々多様化してきており、個々の学生の事情をどこまで考慮して指導すべきかということも考えていく必要がある。若者の日本語の乱れや、人間関係の希薄化によるコミュ

ニケーション力の低下が指摘される中、学生にどこまでの水準のスピーチを求めるべきかなど、教育方針に関して考えていくべき課題は多い。また、5回の発表回数は妥当か、発表課題のテーマは適切か、レポート分析で何を書かせるか、オーディオ機器をどのように有効活用すべきかなど、運用面における具体的な方法も、常に担当教員間で話し合いを重ねながら、改善を図っている。

桜美林大学で、「口語表現」教育が始まって20数年。社会や学生のニーズを踏まえ、教育機関として大学が何をなすべきかを視座に据えながら、大学教育における自己表現能力養成プログラムの更なる可能性について、今後も幅広く検討していきたい。

注

- 1 荒木晶子・穂田照子・尾関桂子・大道卓・齋克実・山本薫(2004)『口語表現ワークブック』実教出版
- 2 藤木美奈子が2009年春学期から2010年秋学期に担当した7クラスの学生を対象に調査。「この授業は苦手意識の克服に役立ちましたか」の問いに対する回答は以下の通り。「大いにそう思う」37.7%、「ややそう思う」56.5%、「どちらともいえない」4.3%、「あまりそう思わない」1.4%、「まったくそう思わない」0.0%。この結果は「しごと能力研究学会第4回全国大会」(2011年10月15日～16日、桜美林大学で開催)で『大学教育における自己表現能力の養成』と題して発表された。

参考文献

- 藤木美奈子(2007)「スピーチに対する自信の変化―口語表現法の授業を通して」『OBIRIN TODAY』第7号 pp.49-68
- 藤木美奈子(2009)「日本語口語表現教育の現状―『口語表現法』の授業から」『第25回関東地区大学教育研究会(大学教育学会関東支部) いまだからこそリベラルアーツ―学士教育課程の構築に向けて― 総会・研究会報告集』pp.47-57
- 藤木美奈子・前川志津・勝又恵理子(2010)「スピーチに対する自信は何によってもたらされるか―授業内容との関係から―」『OBIRIN TODAY』第10号 pp.49-64